

「敵側にだって理屈がある」

英語英米文学科四年 齋田 駿さん

『美少女戦士セーラームーン』

武内直子(講談社)

漫画を好きになって六年、彼はある作品と出会う。

「全てを捨て去る勇気のと全てを受け入れる勇気の力。」

悪を悪として排除するのではなく悪を自分のものとして受け入れる主人公月野うさぎが活躍する『セーラームーン』。

この作品から齋田さんは「自分の嫌いな人ができて排除するのではなく、月野うさぎのように受け入れていきたい」そう話した。

光が生まれる限り闇が生まれる、その闇をどう扱っていくかは自分次第だ。

(英語英米文学科一年 村田すず)

「少数派でも平気」

英語英米文学科四年 山崎 光さん

『ご近所物語』 矢沢あい（集英社）

「おまえは少し違う。」

普段は高いヒールを履いたり個性が出ていた山崎光さん。こう言われとても傷ついた。しかし、矢沢あいの『ご近所物語』に助けられたのだという。

「どーでもいい人と世界を広げても中身は空っぽってカンジ：・それなりに楽しーけど何しても感動がないのよねー。」

この漫画からの台詞である。多数派と無理に合わせなくてもいい、少数派でもいと強く感じた。

（英語英米文学科一年 植木司）

「世界を知る」

日本文学科4年生

濱地 心音さん

『サトコとナダ3』 ユ。ペチカ監修 星海社

濱地心音さんは本が好きで、普段は小説を読んでる。しかし、ツイッターで知った『サトコとナダ3』という漫画を読み沢山のことを学んだ。

『サトコとナダ3』は、大学生のサトコがアメリカ留学でルームメイトのサウジアラビア人、ナダと知り合い成長する物語である。

この本を読むことで、日本と異国の文化の違いを知るとともに、今まで抱いていた宗教への偏見がなくなり、世界を知ることができた、と話してくれた。

（英語英米文学科1年、近江航）

「正義の対は別の正義」

英語英米文学科4年・齊田駿さん

『美少女戦士セーラームーン』 武内直子

（講談社）

幼少の頃に、ハンガリーに住む叔母からある漫画を勧められた。それが『美少女戦士セーラームーン』だったそうだ。

『セーラームーン』は、私たちのイメージするポップな漫画ではないと齋田さんは言う。それを象徴する一言が、「すべてを捨て去る勇氣の力、すべての受け入れる勇氣の力」だ。たくさん悪と向き合った結果、悪にも理由がある、それを受け入れるのも勇氣だ、と主人公が気づいたときの一言である。

月に代わってたくさんのお話を学んだそうだ。

（英語英米文学科1年、 齋藤柊平）

「ロマンスも悪くなかった」

キャリア支援課・工藤奏子さん

『まほろ駅前番外地』 三浦しおん

（文春文庫）

大学時代に母親の奨めでこの本と出会ったという工藤さん。主人公の便利屋の元に来たあのおばあさんの一言がとても印象に残り、心に響いたという。

「ロマンスも悪くなかった。一生あの気持ちを知らずに暮らす人もいるだろうが、私は知って良かった。」

これは、そのおばあさんが昔、戦争に行ってしまった婚約者と、別の人とで心が揺れた時経験したことを語っている。

工藤さんも、学生のうちはたくさん恋愛した方が良く、学生さんに伝えたいと思っている。

「個性とは？」

英語英米文学科4年・山崎光さん

『ご近所物語』 矢沢あい（集英社）

ずっと周りの人たちとは違う「個性的」な格好をしてきた。例えば、髪の毛は金。パツで顔はギヤルメイク。それにプラスして、いつもピンヒールを履いていた。そのため、周りからは「あの人変わっている」と言われ、孤立していた。その時、「自分を殺して周りに合わせなければならぬのか？」と葛藤していた。

しかし、漫画『ご近所物語』のあるセリフによって、彼女の人生は救われたのだと言う。そのセリフとは、「どうでもいい人と世界を広げても中身が空っぽって感じ……それなりに楽しーけど、なにしても感動がないのよね。」だ。今までは、「個性がいけない、自分が周りと合わせなければならぬ」と考えていたが、このセリフを読んで「自分らしく生きよう、自分のことを理解してくれる人を探そう」という考えに変わったのだ。

この記事を読んだあなたは、どう思っただろうか。周りと合わせることも大事だが、自分を殺してまでする必要はあるのだろうか。

あなたの思う個性とは何なのだろうか。

「時間がかかって当たり前」

桂田留名さん（教育研究支援課）

古舘春一『ハイキュー!!!』（集英社）

「芸術系のセンスはない。でも小さい頃から絵を描くことが趣味」。そう話すのは、現在母校の大学で職員として働く桂田留名さん（23）。彼女の日常生活のモットーとなっているのが、漫画『ハイ

キュー!!!』で、試合中の主人公へ対戦相手が発した「センスは磨くもの!!!」という言葉だ。センスを理由に諦めなくなり、やればできると思うようになった。「何事もセンスを身に着けるには時間がかかって当たり前。続けること、始めることが大事。やらなかつたら何もならない」。この先の彼女の人生にさらに幅を広げる大事な言葉になっていきそうだ。

（英語英米文学科4年 溝道未瑛）

「知っててよかったと思ってる」

工藤奏子さん（キャリア支援センター）
三浦しおん『まほろ駅前番外地』（文春文庫）

工藤奏子さん（27歳） おすすめの『まほろ駅前番外地』中編は、多田と行天という二人の便利屋の話である。中でもお気に入りのは曾根田のばあさんのお世話をする場面だ。曾根田さんは二人の男性の間で気持ちが揺らいだ経験があり、自分の気持ちを正直に相手に伝えたことでこの問題を解決した。

「一生、あの気持ちを経験し知らずに過ごす人もいるだろうが、私は知ってよかったと思ってるよ」という言葉に「自分からなにかを発信すること、行動することの大切さを教えてもらった」と工藤さんは言う。自身も似た経験をしていて共感するものもあるらしい。この話を聞き、何もしなければ何も失敗しないが、何も変わらないことを再確認できた。